

私の旅史①【夢多き青春編】

旅のチカラ研究所

2021年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

私は旅のチカラ研究所を設立するまでは旅行記を残していない。そこで研究所設立の59才までの私の旅の歴史を「私の旅史」として残すことにした。それは「夢多き青春編」、「新婚子育て編」、「ナイスミドル編」として、旅という切り口で半生を振り返る。

この「夢多き青春編」は幼少期から結婚する26才までの独身時代で、それはまさしく青春だった。

第一章 中学生まで

■就学前

私は生まれも育ちも群馬県桐生市で、家族は両親と兄と私の4人、今思えば平凡な家庭だった。

就学前の幼い私にとっては家族旅行の記録も記憶もない。その頃、つまり昭和30年代中盤の日本の一般的な家庭では生活することが精いっぱい、私の周りでは家族旅行などを行っている家庭はなかったと思う。

旅は、生きるため食っていくために決して必須ではない。生活にある程度余裕が出てきて人生をより豊かにするために旅があり、当時の日本は戦後が終わり高度成長期に入った頃だが、旅が大衆化するのはまだ先だった。

私の父は仕事で北海道に頻繁に行っていた。桐生は織物の街として有名で、父はその織物関係の仕事をしており年に数回は北海道に出張していた。時々土産を買ってきてくれたので、幼い私にも北海道という場所とはなぜか身近に感じた。



【自宅の玄関前 兄と私】

■小学生時代

桐生市立桜木小学校に通ったが、小学生になっても我が家の家族旅行の記録はない。それでも父が軽自動車を購入して家族4人で県内の山に日帰りドライブに行ったかすかな記憶が残っている。しかしながら昔の軽自動車は非力で、オーバーヒートして山に登れずに戻ってきたことが今でも思い出すエピソードだ。

家族旅行と呼べるかどうか分からないが、夏休みに新潟市にある親戚の家に家族で行った。海まで近い家だったので海無し県の群馬の少年にとっては海を身近に感じる貴重な経験になった。当時の群馬県民、それも県の東部の桐生市界隈の人々が海水浴に行くのは太平洋の茨城に行くのが一般的で、日本海の新潟に行くのは珍しかった。

その新潟に住む叔父から教えてもらったことは、日本海は潮の満ち引きがないということだった。潮の満ち引きは月の引力で海水が移動するのが原因なので日本海のような閉ざされた海ではそれは発生しないという理屈は後になって知ったが、小学生の私は日本海では満ち引きがないということだけを覚えた。逆に私は日本海しか知らなかったのも、大きくなるまで潮の満ち引きというものを経験したことがなかった。

小学校では1年生から5年生までの毎学年、学校行事で日帰りの小旅行があった。これも記録はないが、それでも記憶を頼りに振り返ると概ね以下のようなようだった。

1年生では隣の大間々町（現、みどり市）の「高津戸狭」、2年生は太田市の「金山」、3年生は高崎市の「高崎観音」、4年生は「伊香保温泉と榛名山」、5年生は「東京」だった。

6年生になって初めての本格的な修学旅行は「江の島・鎌倉」の1泊2日バス旅行だった。江の島にある旅館に泊まったことを覚えている。

振り返ってみて気が付いたことがある。4年生まで県内4カ所に行ったうち3カ所は群馬県民から愛されている「上毛かるた」に詠われている。上毛とは群馬県の昔の呼び方で、上毛かるたとは戦後間もない1947年に発行された郷土かるたで、全部で44枚あり群馬県の名所旧跡や輩出した人を詠っている。例えば“き”は「桐生は日本の機（はた）どころ」、「つ」は「鶴舞う形の群馬県」などで、確かに地図を見ると鶴が舞っている姿に似ている。群馬県民は皆、上毛かるたを暗記しており空で詠めるというから郷土教育に果たした役割は極めて大きい。このようなかるたは全国では珍しい。

そして今、私は上毛かるたで詠われている県内の名所旧跡を訪ねる「上毛かるたの旅」というものを思いついた。これは案外面白い企画かもしれない。



【上毛かるた】

■中学生時代

桐生市立桜木中学校に通った。ここでも家族旅行の記録がないが、一人で新潟の親戚の家に遊びに行った。なぜそれを覚えているかというと新潟開港 100 年を記念して博覧会をやっていて、その時に買ったキーホルダーを最近まで持っていたからだ。新潟港は江戸時代に北前船で栄えていたが、日米修好通商条約によって開港 5 港の一つに指定されて、中学生の私が訪れた 100 年前の 1869 年に外国に開港した。キーホルダーが思わぬ役にたった。

学校の行事として 2 年生の夏に榛名山の榛名湖畔に 2 泊 3 日の林間学校に行った。同じ学年には 4 クラスあったので総勢 160 人くらいで行った。榛名湖でカッターを漕ぎ、そして夜はキャンプファイヤーをやったことを今でも鮮明に覚えている。キャンプファイヤーは私にとっては初体験で燃え盛る火がこんなに感動的なのかと驚いた。そしてこの榛名湖畔での思い出は後の私の旅につながることになる。

3 年生の修学旅行は「伊豆・箱根」、シャボテン公園と大室山を覚えている。現在私が会員になっているゴルフ場が近くにあるので、今はこの辺りは自分の庭のように頻繁に行っているが、当時の私はそれを知る由もない。

学校行事ではないが、3 年生の夏休みに群馬県モーターボート競争会の「海の教室」というものがあり、横浜港に係留してある「氷川丸」に一泊するというイベントに参加した。これは地元の名士だった笹川良一が市内の中学生の社会勉強のために、全て招待という形で毎年行われていた。笹川良一は日本の競艇界のドンで、桐生には桐生競艇場があるから地域貢献の一つだったのだろう。そして私はこの時初めての客船に泊まるというものを体験した。もちろん係留されて動かない氷川丸だったが、船に乗って旅に出るという憧れを持った。

鮮明に覚えていることは氷川丸の前にある山下公園に多くのアベック（言い方が古い！）が夜な夜な現れては田舎の中学生にとっては相当刺激的なことをしていた。これはある意味凄い社会勉強になった。笹川良一には感謝しなくてはならない。

氷川丸は 1930 年就航の貨客船で第二次世界大戦では病院船として徴用され、戦後は 1960 年まで太平洋航路で運航を続けた。戦前より唯一現存する日本の貨客船で、現在は宿泊できないが船内の見学はできる。全長 163m、総トン数 11600 トン、乗客定員は 286 名という船だが、当時としては豪華な船だったのだろう。



【氷川丸背景に記念写真「海の教室 S45 8.19~20」】



【中学生の私】

その太平洋航路を使って、私の中学校の音楽担当の女の先生が夏休みを利用して一人でアメリカ合衆国に渡った。夏休み明けの音楽の授業は写真を見せてもらいながら体験談を交えた旅の授業に変わった。確か1回ではなく2～3回は続いたので、相当に感動してそれを生徒に伝えたかったのだろう。

今の私の持論では、音楽も旅もどちらも人生を豊かにするものなので共通点が多い。しかし当時の私にとっては雲の上の話だった。この音楽の先生はいわゆるオールドミスだったので、教師の特権の長い夏休みと独身の資金力を活かしてのことで、一般の人には無理だろうと中学生ながら感じていた。それはやはり羨ましかったのだろう。

そしてこれもまた私の旅行ではないが、私が中学3年生の終わりの3月初め頃に3つ年上の私の兄が大学入試を終えて一人で南紀に旅に出た。そのことに中学生の私は何故か感動した。おそらく自分の力で旅に出るということを身近で感じたからだろう。

第二章 高校時代

■初めての自分の旅

私は地元の進学校、群馬県立桐生高校に進んだ。そして私の旅人生の大きな一歩が、高校1年生の夏休みに始まった。1972年のことだった。

高校生はもはや子供ではない、そういう思いが私には強くあつて旅に出たかった。それは数カ月前に兄が南紀に一人旅をした影響もあるかもしれない。高校生になったのを契機に自分の力で何処かに一泊でもいいから旅に出たいと考えていた。

夏休みに入る少し前から友人たちと何処かに旅行に行こうかという話が持ち上がっていた。いや、正確には私が誘って友人たちも乗り気になっていた。そのために、ああだ、こうだという話し合いを何度も重ねた。その打ち合わせそのものが当時の私には楽しかった。そしてその結果、自転車で榛名山の榛名湖畔を目指しサイクリング&キャンプをすることになった。

群馬県には赤城山と榛名山とどちらもカルデラ湖を持つ同じような山が県の真ん中を流れる利根川を挟んで鎮座している。桐生からは赤城山の方が近くて馴染みが深いのだが、榛名山にした理由は中学校時代の林間学校の思い出があったからかもしれない。旅の行く先を決める要素は過去の思い出、それも良い思い出に影響されることが多い。

榛名旅行は私を含め3人で計画し、小さな三角テントを共同で購入した。といっても1張り1000円もしないテントなので、物価の上昇を考えても当時としても格安で使い捨てに近いものだった。もちろん寝袋もテントマットも持っておらず、キャンプのやり方も知らない全くの素人3人で榛名湖を目指した。

行程は約 60km だが、標高差は約 1000m もある。若いとはいえ自転車での山登りは初めてで、榛名山の急な坂道はかなりきつく、ほとんど自転車に乗らず押して歩いた。

夕食は当時お弁当缶詰というものがあって、それを持って行った。これは今のレトルト食品ではなくて缶詰を一定時間火にかける必要があり、そのままでは食べられないものだった。しかし持参した固形燃料が途中で終わってしまい、キャンプの術も何も知らない私たちは焚火をすることもせずにそのまま缶詰を開けたが固くて食べるのを断念した。そのために夕食は“かっぱえびせん”で飢えをしのぐことになった。

さらに夜になったら、群馬の山岳地域なので夕立による突然の雨に襲われた。普通は雨水が入り込まないようにテントの周りに溝を掘るのだが、もちろんそんなことも知らなかった。そのためにテントに水が入ってきてとんでもないことになった。それでもテントの中央部分は水没を免れたのでテントの端の部分になるべく触れないように足を曲げて上を向いて、頭を高くして眠った。

私の人生最初の旅、そして最初のキャンプは実に苦いものになった。

■再度の挑戦

1973 年夏、高校 2 年生の時に「みなみ東北周遊券」を使って東北の南 3 県の鉄道による旅に出た。1 年前の榛名山に行ったメンバーに 1 名加わって 4 人で行った。もうテント泊は懲りていたのでもう裏磐梯高原のバンガローに 1 泊、駅で 2 泊、国民宿舎で 1 泊した。

この時生まれて初めてバンガローに泊まった。四畳半くらい大きさと、いわゆるベニヤ板 1 枚の“掘っ立て小屋”で雨風はしのげるが、ただそれだけのもので狭くて汚くて相当にがっかりした。今考えると高原のバンガローという爽やかなイメージだけが先行して、過度の期待をしていたのだろう。旅には「期待と落胆」は付きものだ。私が今でも使っているこの言葉を最初に実感したのはこの時かもしれない。

それにしても一泊 1000 円は当時の物価からしても高かった。この教訓から以後の私のキャンプ人生において同様なバンガローに泊まったことは一度もない。



【バンガローの内部 左が私】

それに対して郡山駅では生まれて初めて駅のホームに泊まるという経験をした。これは意外に快適で、駅の中なので安全で時々夜行列車の通過もあって風情さえ感じられた。何よりも無料というのが良かった。

当時は“カニ族”と呼ばれたバックパッカーのブームであり、横に広い大きなリックサックを担ぐとカニのような姿になるのでそのように呼ばれていて、そのカニ族もホームや待合室で泊まっていた。

私にはカニ族への憧れはなかった。その理由は多くの人たちがやっていることはつまらなく感じる天邪鬼的なもので、亜流でも自分流の楽しみを探すという考え方からだったような気がする。

従って私が持っていたバッグはカニ族の横に広いリックサックではなく、ボクシングのサンドバックを小さくしたような船乗りが持つバッグ、漫画「あしたのジョー」の矢吹丈が担いでいたズタ袋のようなバッグを愛用していた。

このバッグの正式名称はマドロスバッグとか、ダッフルバッグというらしいが、現在はこんなバッグを持っている旅行者はいない。よくよく考えるとこのバッグは荷物の区分けができないので取り出すのに苦勞する。イメージ先行のいかにも旅行創成期のアイテムだった。

■桐生青春友歩

私は高校時代にいろいろな活動に参加していた。桐生市内の高校生たちが、高校を横断して集まった自主サークル「桐生青春友歩」というものに参加していた。私が通っていた高校は男子校なので女子高生と話ができるこのような交流サークルは実に貴重だった。

当時は、あるいは今もかもしれないが群馬県は男女別学の高校が多く、男子校と女子校の生徒が交流する機会は学園祭か「合同ホームルーム」くらいしかなかった。合同ホームルーム、何それ？と男女共学の高校生が聞けば奇妙に感じるかもしれないが、今考えると不思議な行事があった。それは男子校の桐生高校のあるクラスが桐生女子高校のあるクラスを指名して一緒にホームルームをするというもので、両方の学校では半ば公認していた。今では信じられないが、そのくらい女子高生と話す機会は少なかった。

さて、桐生青春友歩とはそんな環境にあって珍しい存在だった。このサークルの日常的な活動は高校生が月一回くらい集まって語り合い、レクリエーション、ハイキングなどをするもので、今でも覚えているのはどこかの公民館を借りて餃子を作って食べるという料理教室もやった。私はその時に生まれて初めて餃子を作ったが、かなりショックを受けた。それは我が家では餃子は焼いたものを買ってくるものだと思っていたからだ。



【私が高校2年生の桐生青春友歩のイベントでの記念写真 最前列の一番右が私】

高校2年生の夏、このサークルの夏休みのイベントで30人程の男女の高校生たちが赤城山南面の公民館に泊まる旅行があった。昼はレクリエーション、食事は自分たちで作り、夜を徹して話し合いを行った。このサークルは政治的、宗教的なものではなく、純粋に高校生たちが自分たちの夢や悩みを共有し社会に対して何ができるかという比較的真面目な目的で集まっていた。だから議論は身近なもので自分化して面白かった。

そして私がこのサークルの運営を夏休み明けの高校2年生の2学期から引き継ぎ、3年生になっても受験生でありながら私なりに一生懸命にやっていた。そして次の世代に託したが、残念ながらその後は自然消滅したらしい。

このサークルでの運営経験で私が学んだことは大きかった。同じ市内の高校生といっても、高校によって価値観や志向が全く異なっていた。進学校だけでなく工業高校、商業高校、お嬢様高校とあって、そんな高校生たちをまとめていくのは相当に難しいということがよく分かった。

今振り返ると、年頃の男女が集うので出会いの場という意味合いが強かったかもしれない。

最近このメンバーと何十年かぶりに再開して再び交友を深める中で一緒に旅行に出かけた。そして元JK（女子高生）の彼女たちと当時の話で盛り上がった。その内容はというと誰と誰が付き合っていたとか、誰が好きだったとかという私の知らない事実が実にたくさん出てきて、それが何とも新鮮でうらやましく感じた。やはりあの頃は青春時代だった。

■木曜会

私は「木曜会」という4人のサークルもやっていた。木曜会とは夏目漱石の弟子たちが木曜日に集まって勉強会を開いていた会合の名前で、その名前をいただいた。私たちの木曜会も木曜日の放課後に集まって社会勉強として色んなことに挑戦した。

当時は学生運動が下火になり過激だった学生運動の反動から何もしないという風潮が広まっており、三無主義（無気力・無関心・無責任）と呼ばれていた。私はその三無主義が嫌だったが、かといって政治運動には加担する気もなかった。その結果、木曜会のような個人的なサークル活動に向かった。それは桐生青春友歩にも当てはまる。

木曜会の活動は担任の先生の家に行き勉強以外の真面目な話をしたことや、新興宗教の教会や日本共産党の青年組織にも行き、話を聞き議論もした。そんな社会的なことだけに留まらずに遊びやスポーツについても挑戦した。ゴルフの打ちっぱなし、三角ベースの野球、ボウリング、卓球などいろいろやった。

その勢いもあって3年生になってから私は生徒会副会長になった。生徒会長には木曜会の別のメンバーがなり2人で桐生高校生徒会を動かした。いや動かしたのは錯覚かもしれないが、自分たちなりに力の限り新しい生徒会を切り開いたつもりだった。

その木曜会の仲間たちと高校3年生の夏休みに長野県の学生村に行った。学生村とは、夏休みの暑い時期に長野の涼しい高原で勉強するために安価で宿泊できる民宿村のことで、当時は結構流行っていた。そんな場所に私たちはギターを持ち込んで騒いでいたので、真面目に勉強を目的に来ていた予備校生や大学生から叱られた。

ギターを持って行ったというのは、実は木曜会のメンバーでフォークグループを結成していた。その名も「ホッチキス」、この名前は私が付けたもので“合わせる”という思いがあつての命名だった。私はこの頃から名前、ネーミングの重要性を意識していたのかもしれない。

ホッチキスでは私はウッドベースを担当していたが、ほとんどベースは弾けなかった。初めてのコンサートでは“空振り”の練習をした。上手そうにウッドベースを弾いているように見せる練習で、昔はこんなコンサートも有りだった。いや最近でもアイドルグループが“ロパク”でコンサートをこなすのだから、実はかなり先進的だったのかもしれない。

それでもその後はギターを真剣に練習して、私の高校生活から大学生活、さらに社会人になってもギターとフォークソングは欠かせないものになっていった。



【木曜会 学生村にて 右から2番目が私】



【ホッチキスのデビューコンサート】

■修学旅行

私の通っていた高校は進学校なので修学旅行は2年生の秋に行われていた。旅行先は京都だったが、どの寺や神社に行ったかよく覚えていない。延暦寺の根本中堂の前で撮った集合写真が残っているから当然のように定番の観光名所には行ったのだろう。

行った寺社は覚えていないが、夜の京都の新京極通りを友人たちと何往復もしてナンパをしたことは覚えている。いやナンパではなく古都における社会勉強のためで、修学旅行で全国から京都に来ていた女子高生に交流の機会を求めた。旅の恥はかき捨て、いや旅は日常では考えられない勇気を与えてくれる旅のチカラを試したかった。

その旅のチカラによって声を掛けて同調してくれたのが同じ群馬県の高崎女子高校の生徒だった。群馬県は男女別学の高校が多いので彼女たちもある意味、そんなことを期待して歩いていたのかもしれない。それにしても京都まで来て何も同じ群馬県の女子高生でなくてもいいのにと多少がっかりした。

後に、日本各地を旅行して知り合った人たちに修学旅行は何処に行つたと聞く機会が多くあつた。京都に行くのは中学校の修学旅行、高校の修学旅行は九州、沖縄や北海道というのが多かった。その意味では群馬県の学校はだいぶ地味だった。

いろんな人に聞く中で笑ってしまったことがある。家庭の事情で引っ越しを繰り返したために小学校、中学校、高校の修学旅行が全て京都になったという可哀そうな人もいた。

第三章 高校から大学へ

■アマチュア無線

話は小学生から中学生くらいまで遡る。

私は根っから理工系志向の少年だった。小学生で初めてラジオを自作し、そういうことが大好きになり中学生になってからは桐生から秋葉原まで部品を買いに行ってはラジオや無線機など電子工作に没頭をしていた。当時の秋葉原は今では想像できないような街で、部品屋や電気屋ばかりで昼食を食べる食堂を捜すのも苦労した。

そして中学2年生でアマチュア無線の免許を取るために東京の蒲田に国家試験を受けに平日に一人で上京した。その朝、上野駅で家出少年に間違われて男女の刑事に職務質問をされた。事情を話しても放してもらえず、写真入りの国家試験の受験票を見せて一応信用してもらった。今思い出すと懐かしくも面白い話だ。

そしてアマチュア無線の免許を取り、高校時代はアマチュア無線を相当活発にやった。無線機器やアンテナを作ったりすることはもちろん、電波を使ってミーティングをする今で言うと言葉が見えないオンライン会議のようなことで人とのコミュニケーションをとることも好きになっていた。

そのアマチュア無線仲間たちとの交流を図るべく赤城青年の家で合宿研修会を開いた。集まったメンバーは高校生を中心にした男女合わせて25人、普段は電波を介して顔を見ずに話している仲間たちだがリアルに集まると、これはこれで面白かった。一応研修会なので私もそこで電子工学入門という講座の講師をした。人生初の講師体験になった。

この合宿研修会の時には、私は既に高校を卒業しており、浪人生活に入っていた。



【アマチュア無線仲間との合宿研修会 最前列の左から3番目が私】

■貴重な経験をした浪人生活

サークル活動やアマチュア無線に明け暮れ、学生村でも勉強しなかったことが響いたのか、見事に大学受験は失敗して浪人生活に突入した。

私の好きな言葉で「お天道様は見ている」というのがあるが、自分の良心と素直に対話することをさりげなく説いているこの言葉は実に奥が深い。やはり努力しなかった私をお天道様は見ていたのだろう。

私の浪人生活は予備校に通わない自宅浪人だった。このことを私の旅史で触れるのも変な話だが、この浪人生活で私は人生において大変貴重な経験をするようになった。

高校を卒業して秋までは家庭教師とパチンコ屋の店員というアルバイトをしていた。もともと高校時代も勉強しなかったので半ば浪人は覚悟しており、それでも親に経済的負担をかけたくないという理由で自宅浪人を選んだ。しかしアルバイト以外の時間は遊んでいて受験勉強はほとんどしていなかった。

勉強しないから学力は落ちる一方だったが、その事実を客観的に知ることもなかった。

ダイエットを成功させるためにはまず体重計に乗ることだというが、これは自分の体重を知ってダイエットをやらなくてはという意識付けになるからで、それでもダイエットは成功しないことの方が多い。私の場合はその体重計さえも乗らず、つまり模擬試験も受けずにだらだらと過ごしていた。

人間というのは怠惰な生活に陥ると理性では分かっているけどどんどん流されて行くという良く聞く話だ。まさにそれがこの時で、今思えば歯止めの効かない泥沼に入ってしまったいて、これではいけないと思いつつも時間だけが過ぎていた。

そんな時の9月の3連休だったが、予備校に通っていた友人から模擬試験の替え玉受験を頼まれた。高校1年2年の夏休みに一緒に榛名山や東北に行った友人で、その3連休に用事があって試験を受けられないということだった。予備校生にとって模擬試験、それも全国統一模擬試験が受けられない用事とは一体何だろうか。まあ、そのことはここで触れないでおこう。

暇だった私は彼の替え玉になって全国統一模擬試験を受けた。

そしてその結果はとんでもない数字になって出てきた。点数が悪いのは予測していたが、あまりに悪過ぎた。彼の志望校のどれもが合格可能性ゼロパーセントが示された。これには彼も驚き、当然彼の両親も驚いた。彼は替え玉受験のことを両親には話していなかったらしい。そのことを明かすと連休で何をやっていたか白状しないとイケないからだ。

合格可能性ゼロパーセントという数字は、実は彼よりも私の方が遥かに重大問題だった。彼は私と同じ理科系で、志望校もほぼ同じだった。私は、浪人は1年限りで1年やってダメだったら寿司屋の板前になると宣言していた。本当にそのつもりでいたのだが、ここまで決定的な数字が出てくるとは思わなかった。このままでは人生設計が大幅に変更されることになり、私の夢である電子工学の技術者、最近の呼び方ではエレクトロニクスのエンジニアの道が断たれることになる。

しかし私は諦めることができず、これを契機に私の浪人生活は一変した。

雨戸を一日中閉めて部屋を真っ暗にして電気スタンドの灯りだけの夜中の環境にし、24時間のうちで睡眠時間を除いた全ての時間を勉強に費やした。だから1日17時間くらいは勉強した。休憩時間はなく、食事の時も食べながら勉強し、トイレや風呂に入る時も単語帳などを持ち込み勉強した。

10月後半から、2月前半まで同じペースで勉強した。だから私の受験勉強は実質4カ月間だった。その4カ月間は一切外出しないので日に当たらず運動もしない生活に明け暮れた。模擬試験も受けておらず、暗中模索の勉強が続き、顔はげっそりと痩せて青白くなっていた。

こういう事態になれば精神的にも不安定になるはずなのだが、当時の私は精神的に云々いうそんな余裕さえもなく無我夢中だった。それはいわゆるゾーンに入っていたのかもしれない。

勉強に没頭した成果で、当時の国立一期校の筑波大学と二期校の群馬大学に合格した。

何事も真剣にやれば出来ないことはない。ゼロパーセントだとコンピュータが予測しても、人間の努力で覆せるという貴重な経験をした。これは単に大学に進学できて将来のエレクトロニクスのエンジニアへの道が開けた以上に貴重なことを学んだ。

やはり、お天道様は見ていてくれた。

そしてもう一つ私の好きな言葉に上杉鷹山の有名なあの言葉が加わった。「なせば成る、なさねば成らぬ何事も、成らぬは人のなさぬなりけり」だ。

■大学1年生の夏休み

私は一期校の筑波大学ではなく、自宅から通える群馬大学工学部電子工学科に入学した。大学生になった私は高校生活でやっていたようなサークル漬けのキャンパスライフを楽しんでいた。

フォークソング同好会、落語研究会、ESS (English Speaking Society)、漫画研究会に入部し、かなり忙しい大学生活を送っていた。入学してから夏休みまでは掛け持ちのサークルの新入生歓迎コンパや日々の活動が忙しく、旅行に行く時間はなかった。

夏休みに信州の美ヶ原高原のホテルでの住み込みのアルバイトに友人から誘われた。給料は安いが自由時間がたくさんあって高原に遊びに来る若い女の子たちと話しができるから面白いぞ、という誘いだった。私は旅行気分が味わえて、多少でもお金も手に入り若い女の子とも話せるというこんな美味しい話はないだろうとすぐに飛びついた。

ところが実際に行ってみると全く違っていた。仕事は朝6時から晩10時までフルに働き、女の子と話をする時間など全くなかった。



【美ヶ原 うつくしの塔】

さらにここの経営者がひどかった。

美ヶ原には牧場があって牛が放牧されているので、当然のように搾りたてということで牛乳を販売していた。ところがこの牛乳は私たちアルバイトが地下の倉庫で市販の紙パックの牛乳を開けて、わざわざバケツに入れ替えて持ってくる。従って雰囲気だけは搾りたてで、もちろんバケツに入っている中味は普通の牛乳だ。それをお客は「牛の香りがする」とか言って飲んでいた。

あるいは美ヶ原特産馬鈴薯と称してジャガイモを蒸かして売っていたが、これは段ボールを見たら長崎馬鈴薯と書いてあった。

最もひどかったのは食事だ。片付けをしていたら、お客が残したものでも食べられそうなものはとっておけと言われた。この言葉には我が耳を疑った。

そんなことが続き当初は 3 週間の予定だったが、1 週間くらいで辞めて帰ってきたので私の夏休みの計画は大幅に変更になった。それよりもこのホテルは名前も知れた施設なのに、平気で嘘偽りが行われ、世の中の裏側の見たくない部分を見てしまったことの方がショックだった。

それでも夏休み後半には 3 泊 4 日で群馬県の高原で半分旅行を兼ねて落語研究会の夏合宿が行われた。和気あいあいとした雰囲気も楽しく、先輩方は落語だけでなく人間性についても面白くて尊敬出来る人が多かった。

■途方もない大計画

1975 年の晩夏、そんな大学 1 年の夏休み最後の日、大学に入学してから知り合った大川とたまたま話す機会があった。夏休みを振り返って散々な目にあったことを私が話し始めた。

この時の話が私の旅行人生を一気に動かした。話の要点は、「大学生にとって夏休みとは、大きなことに挑戦する絶好の機会だ！」ということだった。

彼の親戚の人が大学生の時から世界を股に掛けた旅行をしていて、若い時にオーストラリア政府を相手に交渉して観光事業を立ち上げたとか、いろいろな武勇伝を聞いた。残念ながら内容の詳細は覚えていないが、とにかく凄い人がいて、それは大学生の夏休みから始まったというものだった。

それ以外にも有名人や偉人たちの浪漫に溢れる学生時代の旅の話もたくさん出てきた。当時は金はないが夢はあるという大学生活をテーマにしたテレビドラマも放送されていた。私たちはその主人公になるかのように話は盛り上がった。

何かを成し遂げたいという話がどんどん膨らんでいった。私の好きな言葉の中に「アイデア無限大」というのがあるが、まさしくそんな感じでアイデアが沸いて出てきた。

そして最終的には翌年の夏休みの旅行計画が出来上がってしまった。それは日本からウラジオストクに渡り、シベリア鉄道に乗ってヨーロッパに行き、アルプス最高峰のモンブランに登って、帰りはシルクロードをジープで帰ってくるという途方もない大計画になった。

■大学 1 年生の秋から

その計画を実現すべく秋になっても検討が進んだ。かなりハードルが高いということは分かってきたが、何をやるにも資金は必要なので大学 1 年生の夏休み以降はアルバイトに没頭した。

アルバイトは、平日は家庭教師と土日は家具屋の店員、短期的には色々なこともやった。私は高校から大学卒業するまでに 12 種類のアルバイトをこなしたが、その半分くらいはこの期間に経験した。短期間でなるべく多く稼ぐ必要から中には辛い仕事もあったが、旅行資金を貯めるという確固たる目的があったからできたのだろう。美ヶ原高原のホテルでのアルバイトのように甘い中途半端な気持ちでは途中で帰ってくるのが落ちだが、そんなこともなくむしろ働くことの意義のようなものを感じることができた。やはり物事には目的が必要だ、それも真つ当な目的であればあるほど良いのだろう。

ここでは働く目的の話だが、仕事そのものもまた重要になるということは言うまでもない。それをここで触れるのは時期尚早で、とにかく自分の好きなことを仕事にすることが充実した人生をおくることになる。

サークル活動もいくつも掛け持ちしては時間も資金も足りないので一つに絞ることにした。当時はフォークソングブームが続いていたので常識的にはフォークソング同好会を選ぶところだが、私の天邪鬼的発想で誰もがやっているものをあえて避けてマイナーだが奥の深い落語研究会一本にした。

それは夏休みの合宿旅行で落語研究会の面々に感じるものがあったからだ。やはり旅行は人や組織を早く理解することができる。それも旅のチカラの一つだろう。



【落語研究会の市内公演会 大学 1 年生の秋】

第四章 日本一周

■変更された計画

シベリア鉄道からモンブラン登頂そしてシルクロードの大計画は、検討を重ねれば重ねるほど困難だと分かってきた。計画の縮小は少しずつ始まりヨーロッパは諦め切れなかったが、単なる観光旅行ではなく自分たちだけのオリジナルな大旅行を作るという観点から最終的には日本一周旅行に落ち着いた。これには結構葛藤があったが、期間と費用との観点から致し方なかった。特に期間は理科系の大学生の場合は実験とそのレポートに追いまくられて、留年を覚悟しないと長期間休むことは難しい。

メンバーは私と大川に佐野というやはり同じ学科の友人を加えた男3人で、大学2年生の夏休み50日間かけて日本一周旅行をすることになった。

私たちの日本一周旅行は自動車による旅で、アルバイトで貯めた費用は1人25万円、3人で75万円だったが、この中には自動車購入費用は入っていない。それは三菱自動車のディーラーから「デリカ」を25万円で購入したが、無傷で戻ったら同額で引き取ってもらう約束をしての購入だった。それで購入資金を親から借りて、無傷で帰ってきたので自動車購入費用は発生しなかった。実は2カ月間限定の保険をかけており仮に傷つけても保険で直せた。

車体の横には「日本一周 男が行く」と書き、正面から見たら人間の顔のようにペイントした。購入した車は4ナンバー、つまり貨物運搬の商用車だったので車の屋根にはキャリアが付いていた。荷物は屋根に積み、後席をたたむと大きなスペースが生まれるので床にカーペットを張って車内で車座に座って食事や雑魚寝もできるようにした。



【三菱自動車のデリカ 左が佐野、右が大川、女性たちはユースホステルの人】

旅の行程は滞在日数を各地方に割り振った。北海道は20日、九州は10日、東北は7日、山陰・山陽は8日、四国は4日、残りは移動に充てた。今思えば、そんなことは旅行プランニングの基本だが、知らず知らずに試行錯誤の末にその基本に沿って計画していた。

関東を起点に日本一周をする場合、先に北上して東北・北海道を巡るか、あるいは先に西に向かって西日本を巡るかという選択肢がある。さらに細かく言うと内陸を通るか海岸沿いを通るか、海岸沿いの場合には時計回りか反時計回りかも選ばなくてはならない。

日本一周のコース取りを多くの人に聞くと、答えはほぼ同じように返ってくる。まず北上し、海岸沿いを半時計回りに行くというものだ。この時の日本一周から40年以上、いろんな場所でいろんな人に聞いたがほとんどは同じ回答だから不思議だ。

私たちも同じで、桐生を出発し東北から北海道に入り、小樽からフェリーで福井敦賀に渡り、山陰、山陽を経て九州入りし、九州から四国に入り、四国から岡山経由で帰るというものだった。

特徴的なことは関東圏と中部圏と関西圏は通過しただけで、沖縄にも行っていない。厳密には日本一周とは言い難いが、限られた日数で全部回るよりも重点化志向をとった。



■出発、そしてアクシデント

1976年7月10日に友人たちの盛大な祝福を受けて出発した。ところが出発して1時間もたたないうちに車に異常が発生した。冷却水の温度が異常に高くなったのでラジエターの故障らしい。早速戻って三菱自動車のディーラーに駆け込んだ。結局、修理に2日間かかりることが分かり出発を延期させた。

ところが友人たちの盛大な見送りもあったのでおめおめと大学に戻る訳にはいかず、こっそりと家に戻って2日間をひたすらこもって時間を潰すことになった。

そして翌々日、日本一周の正式な出発日は1976年7月12日になった。2日間の短縮は東北地方で吸収することになり東北地方の南半分は割愛して、東北自動車道を利用して一気に北上することになった。

ところがその東北自動車道で、またとんでもないことが起きた。サービスエリアに入った時に屋根に積んであった衣装ケースの蓋がないことに気が付いた。衣装ケースはスチール製でももちろん蓋もスチール製でそれなりに大きい。こんなのが飛んで来たら後ろの車はたまったものではない。私たちは気が付かずに車を走らせていが、これには冷や汗が出た。

しばらくの間は高速道路の事故のニュースを気にかけていたが、何もなかったようでまずは安心した。それにしても波乱の幕開けになった。

■宿泊

宿泊手段は概ね3種類で、1/3がキャンプ、1/3がユースホステル、1/3がその他の様々な施設だ。その中のユースホステルは夏休みは人気があって予約が必要なので、大まかな計画に沿って予約をして行った。

キャンプは高校時代の榛名湖畔での初キャンプで非常に苦い思い出があったが、実は大川は大学のワンダーフォーゲル部に籍を置いていたのでキャンプのプロだった。その大川の目になかったテントはドーム型テントで商品名を「エスパース」といい、当時のエベレスト登山隊も使ったという優れものだった。

黄色い三角テントしか無かった当時としては、珍しい青と赤のドーム型テントはどのキャンプ場でも羨望のまなざしで見られた。

どこかの大学のキャンパスで勝手にテントを張って泊まっていたら、朝早く夏期講習に来た女子大生がテントの中を覗き込んできた。聞くと私たちのドーム型テントを見て宇宙船かと思ったというから信じられない。出てきた我々は宇宙人と思われたのだろうか。



【ドーム型テントのエスパース】

プロパンガスボンベとコンロ、鉄板を持って行ったので、ほとんどの食事は **BBQ** になった。

飲み物は日本酒を一升瓶で飲むことにこだわった。“日本酒一升”を“日本一周”にかけた言葉遊びで、一人で一升は無理だったが 3 人で力を合わせて一升（一周）達成した。

ギターを持って行ったのでキャンプはギターで盛り上がった。どこかのキャンプ場ではギター一本で騒いでいたら、他のキャンパーが加えて欲しいと言ってきた。そして私たちが 3 人しかいないことにびっくりしていた。ギターがあれば何でもできたと勘違いする時代でもあった。

ユースホステルは 100 年以上も前のドイツで子供の教育目的のために夏休みの学校を借用して始まり、その後は全世界に広まり日本には第二次世界大戦後に入ってきた。そのために通常の宿にはないルールがあった。例えば夕食後に宿泊者が一同に会して語らうミーティングや、自分で食器を洗うことなど、もちろん男女別々の相部屋で喫煙も飲酒も禁止になっていた。

現在では施設も利用者も少なくなり、時代の要請からルールはだいぶ変更されてきている。当時は若者の旅といえばユースホステルが当たり前で、宿泊費も安くて 1 泊 2 食付きで 1500 円くらいだった。

安心、安全な宿で旅行の情報収集にも適しており、何よりも女子大生が多く泊まるので彼女たちと知り合うにも好都合の宿だった。確かに多くの女子大生や若い女性たちと一緒に記念撮影した写真が多く残っている。しかし残念ながら期待していたようなアバンチュールはなかった。



【北海道札幌近くの花畑】



【北海道摩周湖】



【島根県の出雲大社】



【高知桂浜の駐車場】

高知桂浜では通り雨が降ってきたので、雨がしのげる高架の下の駐車場に車を停めて炊事をしたが、あまりに雨が気持ち良いのでシャワー代わりに体を洗いシャンプーまでしてしまった。

残りの 1/3 のその他の施設とは、具体的には国民宿舎、民宿、車の中、友人の家、映画館、長距離フェリー、お寺、祠（ほこら）などだ。

お寺はたまたま通りかかったお寺に宿泊をお願いしたら、「どうぞ本堂へ」と駄々広い本堂に通された。そんなことを頼むことができたのは、やはり大学生だからなせる業だ。祠は勝手に泊まったが、時代劇の中だけかと思っていたことが現実化することも貴重な体験になった。それにしてもスリリングで、怖くて一人ではとても泊まれないと思った。



【泊めてもらった寺の本堂】



【勝手に泊まった祠】

車中泊については、車の中にはカーペットを敷いていたが固くて寝心地が悪くとても寝るには耐えられない。そのうえ窓を閉めているので暑く、開けておけば虫の侵入がある。実際に寝たのは泊まる場所が見つからない緊急時だけで 1~2 回しかなかった。

■日本を知る

この旅では様々な体験をし、とても勉強になった。

一気に一周することによって日本列島のサイズ感をつかめた。といっても当時はまだ外国を知らないで、こんなに広いのかというのが素直な感想だった。それは面積もそうだが、日本各地で人々が同じように暮らしているということだった。海岸線を走っていると少し突き出た小さな半島を回ると入り江があって集落があって漁港があるという風景は、日本各地の海辺の暮らしの原風景だ。それは山の中も同じで、田んぼや畑があって山があって麓には小さな集落があるという、いわゆる里山の風景はどこの山間部でも共通で農村の原風景だ。

この共通のイメージどおりの景色が日本各地で延々と登場してくるから広いと感じた。共通でない部分が有名観光地になっているということを当時の私の日本列島に対する認識だった。

当時よく聞かれたことは「どこが日本で一番良かった？」という質問だ。私はまず北海道と答えた。それは先ほどの共通部分が北海道だけがちょっと違っていただけで、明らかに北海道は本州や九州、四国と違ってスケールが大きかった。スケールだけではなく雰囲気もどことなく異なっていた。やはり蝦夷地、江戸時代中期まで日本ではなかった。

そして「北海道の中でも、特にどこ？」という質問の答えはなかなか難しい。それでも当時答えていたのは利尻島だった。標高 1721m の利尻富士のある島で、山が島になっている。その利尻富士を私たちは海岸の民宿から歩いたので、辛かったものの抜群の景色に感動した。

島も初体験で島ならではの雰囲気やおもてなしが実に気に入った。民宿の料理は新鮮な海の幸がたくさん出てきて抜群に美味かった。



【利尻富士頂上から海の向こうの礼文島を臨む】

いろいろな旅行者とも知り合って、面白い話もたくさん聞いた。

日本三大美人の産地は、秋田、金沢、京都だと聞いた。金沢と京都は立ち寄らなかったが、秋田は確かに美人が多かった。秋田出身の当時のアイドル歌手の桜田淳子のような女の子は秋田のどこにでも見かけられて、感激したことを覚えている。

日本三大ブスの産地は、仙台、水戸、名古屋だと聞いた。このうち仙台は立ち寄ったが、まだ旅に出たばかりだったので、その情報を聞く前だった。

その他の何カ所は当時まだ行ったことがない土地だったが、私の頭の中にその美人とブスの産地はしっかりとインプットされた。

さらに面白いことも聞いた。青森県から日本海の海岸線を南下すると、バスと美人の産地が交互にあるという。青森はバス、秋田は美人、山形はバス、新潟は美人、富山はバス、石川（金沢）は美人、福井はバス、京都は美人・・・なるほど。

■食事

泊まった宿で夕食に出てきたトマトに何をかけるかが話題になった。私は塩をかけて食べ、他の人たちはマヨネーズ、ソースをかけた人もいた。私の兄は醤油をかけていたのでそのことを話すと砂糖、ドレッシングなどトマトには実に様々なものがかけていることが分かった。唯一聞かれなかったものはトマトケチャップだけだった。

そもそもトマトは南米が原産で大航海時代に食用ではなく鑑賞用として欧米で広まり、日本に入ってきたのは明治時代で、本格的に日本に広まったのは戦後になってからだ。色も臭いも味も独特で、なかなか日本人には受け入れられなかったから様々な調味料がかけられたのだろう。

食べ物の話ついでに、50 日間の旅で私の食べ物の好き嫌いは無くなった。当時のユースホテルの食事はほぼ一品料理で、例えば焼魚ならそれだけでご飯を 3 杯食べた。3 杯と強調するのは、食べ盛りなのは当たり前だが、昼食は質素なことが多く朝食と夕食をたくさん食べるようにしていた。食べず嫌いや苦手だったものもご飯を 3 杯食べるための貴重なおかずなので残さず食べることになり、必然的に好き嫌いはなくなった。

贅沢三昧の旅では味わえない、貧乏旅行ならではのことだった。これも旅のチカラだろう。

■日本一周の結果

実際に日本一周をして色々なことが勉強になった。その中でも最大の教訓はやはり企画だろう。結果としては日本一周になったが、最初から日本一周を目指していたならば、おそらく北海道一周くらいになってしまっただろう。

私の知り合いの女子学生 3 人は北海道自動車旅行を計画したが、親の反対にあって計画が大幅に縮小され東北 2 泊 3 日の旅になった。彼女たちも作戦として最初に日本一周の企画をしておけば、北海道には行けたのかもしれない。

やはり夢は大きく持たないといけない。私の好きな言葉の中に、「理想は高く、姿勢は低く」という言葉が仲間入りした。

そして以下の数字が残った。走行距離は 9521km、平均燃費は 9.94km/l だった。



【鳥取砂丘 左から佐野、私、大川】

第五章 その後の大学時代

■初めての沖縄

1977 年、日本一周後の翌年の春、つまり大学 2 年生から 3 年生へと進級する 3 月に沖縄に行った。日本一周と言っているにもかかわらず沖縄には行っていなかったので石垣島などの八重山諸島を目指して日本一周と一緒にいった大川と二人で旅に出た。

当時の飛行機はまだ LCC や割引制度もなく貧乏学生には高かった。そのため東京竹芝から那覇までは船で行った。そしてその 24 時間の船旅は大変なシケだった。何しろ船内の食堂のテーブルに置いたカレーライスが船の横揺れで反対側まで動いていった。この時の船揺れは以後の私の船旅の中では最大で、今でも破られていないと思っている。

那覇には同じ大学の友人の実家があり、そこに数日泊めてもらい那覇市内の観光をした。

当時の沖縄は返還からまだ 5 年しか経過しておらず、自動車はアメリカ合衆国と同じ右側を通行していた。泊めてもらった友人の父親は個人タクシーの運転手で、この翌年に本土と同じ左側通行に変わるとのことで、金がかかってしょうがないとこぼしていた。

那覇を離れこの旅の主目的地の八重山諸島の石垣島に船で渡った。まずは島内をレンタバイクで一周した。ここで初めて右側通行の運転を体験することになった。それでも那覇に比べれば当時の石垣島は自動車も信号も少なく、右側通行はあまり気にならなかった。

少し驚いたことは島の人たちと話をすると沖縄本島のことを沖縄と呼んでいた。自分たちの島は八重山あるいは石垣とか竹富とか呼んでおり、八重山諸島は沖縄つまり琉球王国ではないという意識があったのだろうか。

竹富島には日帰りで渡り、のんびりとした島の暮らしに綺麗なビーチを楽しんだ。現在ものんびりして綺麗なイメージの島だが、当時はもっと素朴だった。

あの有名な「星の砂」を大量に持ってきた。星の砂は今では持ち出し禁止になっているらしいが、私の家には今でも当時持ってきた大量の星の砂がある。



【竹富島のビーチ】

西表島は石垣島と同じくらいの大きさの島だが、自然が圧倒的に多く残っている未開の島だ。そしてこの西表島が相当気に入ったので旅の日程の半分の 10 日間程滞在した。

特別天然記念物の西表山猫（イリオモテヤマネコ）が有名だが、私たちは民宿にいた西表飼猫（イリオモテカイネコ）しか見ることができなかった。この西表島で自然や海の美しさ、人々の素朴な暮らしに感動した。

民宿の近くにダイビングショップがあってこの時にダイビングを教えてもらった。そのダイビングショップは夜にはスナックになり、毎晩のように通った。



【スナックの飲み仲間たちとのショット 中央が私】

そして世界一綺麗といわれる八重山諸島の海の虜になり、毎日のように海中散歩を楽しんだ。しかし海蛇の脅威にもさらされた。海蛇は猛毒のものが多く、海中で何匹か遭遇したが幸いにも被害はなかった。海では海蛇、陸ではハブ、大自然の多く残る西表島は危険と常に背中合わせだった。

住吉地区というところに泊まったが当時その地区では民宿は一つしかなかったので、昼も夜も海辺は貸し切り状態だった。砂浜も綺麗で、遥か彼方には日本最西端の島、与那国島も見えた。その向こうは台湾があるはずだ。

民宿に泊まったメンバー全員で夜の海岸に出てキャンプファイヤーをやった。もちろん星空は綺麗で、私たち以外は誰もいない。沖縄の酒、泡盛のおかげもあって相当に盛り上がったことを覚えている。当時の泡盛は今と違ってかなり癖のある酒で、最初はあまり飲めなかったが、それしか飲み物がないという状況に置かれると徐々に飲めるようになり、最後の頃にはむしろ好きになっていた。人間の適応力、いや酒への執着は凄いと感じた。



【海岸でのキャンプファイヤーの様子 中央でギターを弾いているのが私】

帰路は那覇まで船、そして那覇からは飛行機で帰った。那覇以外は全て民宿に泊まったが、そんなに高くはなかった。旅の期間は19日間、費用は約10万円だった。

私はこの旅で沖縄の海を経験し、そして海に魅せられた。これはこの後の私の旅に大きな影響を与えることになった。

■冬の北海道パートⅠ

1977年12月、大学3年生の年末に冬の北海道に行った。

メンバーはまた大川と二人だが、それは私と大川が沖縄に行っていた時に、もう一人の日本一周のメンバーだった佐野が3月の北海道を旅しており、寒い時期の北海道を絶賛していた。その影響から冬の北海道を求めて年末に家を出て津軽海峡を渡った。

私は自宅以外で正月を迎えるのがこの時初めてで、青森駅の青函連絡船の待合室で紅白歌合戦を見ていたら、石川さゆりが熱唱する津軽海峡冬景色をその現地で体験することになるという感動的な旅の始まりになった。

当時の北海道には個性的なユースホステルや民宿が多くあって、それらの宿は人気があるので夏はなかなか泊まらない。しかし冬は旅行者が少ないので簡単に泊まれて、尚かつ快適だった。部屋の中は暖かく、もちろん料理も夏よりも冬の方が豊富で美味しい。何よりも宿泊客が少ないので宿泊客同士や宿の人たちとの交流が非常に深く面白かった。夏のようなせわしなさがなく、とてもものんびりして良かったことを思い出す。

浜頓別の「トシカの宿」、常呂の「船長の家」、斜里の「おやじの家」、十勝の「田園」などに泊まった。10日間で約4万円の旅になった。



【天北線 敏音知（ピンネシリ）の駅】

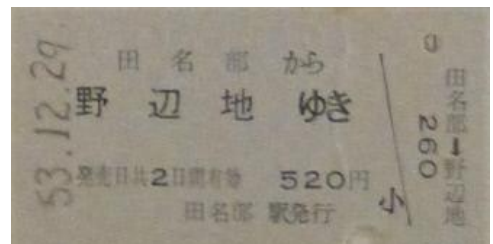
■冬の北海道パートⅡ

翌年の大学4年生の年末年始も北海道に行った。ただし今度は一人旅だった。

北海道に向かう東北本線の列車の中、隣の席に座った女の人と話すことになった。私が一人旅で予定は何も決めていないと言うと、青森の田名部の彼女の実家に泊めてくれるということになった。彼女の年齢は私と同じくらいか少し上で女性自衛官だった。どういう経緯で泊めてもらうことになったのかは覚えていないが、決して私から頼み込んだ訳ではなく旅の若者に対する親切心だったのだろう。

実家とは聞いていたが、実は両親はいなくて兄夫婦の家で小さな子供も2人いて、ナショナルショップの家電販売店だった。私は大学の工学部電子工学科の4年生だったので、電気店の仕事を少しだけ手伝ったが、一宿一飯の恩義に報いるほどではなかった。夕食は小僧寿しを買ってきてくれてみんなで食べた。年末の電気店はとても忙しいので、小僧寿しは私のためなのか分からないが、とても申し訳なかった。

電気店の二階の居住スペースには2部屋しかなく、私がそのうちの一部屋を使い、もう一つの部屋に兄夫婦の家族4人と自衛官の彼女が寝た。これは本当に申し訳なく思った。忙しい年末に私のような見ず知らずの学生を泊めてくれた。それも余っている部屋ではない。今思えば考えられないことで、それを自衛官の彼女も、彼女の兄、その奥さんも嫌な顔もせず暖かく迎えてくれた。私はその人々の温かさが信じられなかった。当然、青森とそこに住む人々が大好きになった。



【大畑線の田名部→野辺地の切符】

そして冬の北海道の正月を一人でのんびりと回った。

交通費は冬の北海道周遊券 14640 円、宿泊は民宿とユースホテルで、層雲峡ユースホテルの領収書は一泊二食付きで 2250 円と残っている。宿泊地は青森の田名部、層雲峡、常呂、霧多布岬近くの浜中、斜里、旭川だった。周遊券を使った貧乏旅行で現金はなくても帰宅できたので桐生駅に着いた時の所持金は 50 円だった。12 日間約 5 万円の旅だった。

■マリンスポーツの旅

大学生活後半は日本一周で行き残した関西圏、中部圏を意識して回るようになった。そこにマリンスポーツを組み合わせた旅が多かった。

3 年生の夏は紀伊半島一周 1600km の旅に出た。沖縄でダイビングを覚えてから海に魅せられて、ダイビングを目的にして紀伊半島を反時計回りで一周した。もちろん定番の日の岬、那智の滝なども行った。紀伊半島南端の潮岬や紀伊大島付近は日本のサンゴの北限といわれており、潜るとサンゴを見ることができたが、当然のことながら沖縄の海には到底かなわなかった。

大学 4 年生になってダイビングでは飽き足らず、今度は大川とヨットを購入した。ヨットといってもディンギーと呼ばれる小型のもので車の屋根に積むことができる。ミニホッパーの愛称で呼ばれたヤマハのヨットは、1～2 名乗りで約 20 万円した。

初夏に、まずは手はじめに房総半島一周の旅、ヨットを積んでセーリングを楽しみながらキャンプで回った。



【当時乗っていた車の三菱のギャランに積んだヨット】



【セーリングする私】

そして夏休みには北陸、琵琶湖、伊勢志摩にヨットを積んで本格的な 10 日間のキャンプ旅行に出た。琵琶湖でキャンプをしていた時には、私の母校の桐生高校野球部が甲子園で勝ち進んでおり、その試合に勝ったら甲子園に応援に行くつもりだったが、惜しくも琵琶湖湖畔で聴くラジオから朗報は届かなかった。

当時も今もその時のことを後悔している。どうして甲子園にまっすぐ行かなかったのか、人生にはそう多くチャンスはあるものではない。明らかに優先順位付けを誤った。

そのことから私の好きな言葉に「行ける時に行く」という言葉が加わった。この言葉はとてもシンプルだが、旅を計画実行する時の私のポリシーになっている。

大学に入学して間もない頃から私には飲み仲間ができて、大学のキャンパスや仲間の下宿に集まっては鍋をつついたので「鍋会」と呼ぶようになった。その鍋会の仲間たちと能登半島一周の旅 1200km に行った。今でも鍋会の仲間たちとは家族ぐるみで付き合っている。

日本を旅していて群馬県から来たというと、当時は多くの人から尾瀬のことを聞かれた。実は私はその尾瀬には行ったことがなかった。大学を卒業すると群馬県を離れることになっていたの、まさしく「行ける時に行く」ということで、大学 4 年生の秋に尾瀬に行った。紅葉が終わった頃にはマイカー規制がなくなるので、大学の研究室仲間を中心に車 2 台に分乗して桐生から日帰り往復をした。

尾瀬へは日帰りのハイキングだったが、海を中心に旅行を楽しんでいた私にとっては新鮮なものに感じた。そんな穴場観光地は意外に多いのではないかと思った。まずは地元を知るべきだったと反省しつつ、旅行に限らず足元を固めることの重要性に気が付いた。



【尾瀬ヶ原から至仏山を臨む】



【同行したメンバー】

その他、研究室の仲間や別の友人たちと関東各地から甲信越の小旅行を繰り返し、大学 4 年生で日本の全都道府県を制覇した。

■友人の刺激

私が日本一周をして 1 年半後に鍋会のメンバーの一人が、大学 3 年生から 4 年生になる春にヨーロッパに一人で行った。4 月の新学期が始まる前に日本に戻って来る予定だったが、そんな時に大きなニュースが飛び込んできた。

彼が乗っていた大韓航空機がシベリア上空を領空侵犯したということでソビエト連邦の戦闘機に威嚇射撃され、強制着陸させられて乗員乗客全員が拉致されたという。

一週間くらい経ってから彼が戻ってきた。早速、鍋会を開いて労をねぎらったが、その飲み会は「生きて帰って残念会」と名付けられた。ジョークにしてもひどい名前だ。もちろんネーミングを重視する私が付けた名前ではない。

その中で彼からは事情を詳しく聞くことができた。戦闘機に機銃掃射されて、彼が座っていた斜め前のその前の席の乗客が被弾して亡くなったという生々しい話も聞いた。生きた心地がしなかったと言っていた。ついでに「なぜ行ったのか？」と訊いたら、「植木の日本一周に刺激された」という答えが返ってきた。その言葉はとても意外だったが、なぜかとても嬉しかった。自分のしたことがある意味評価されて誰か動かした。

実は私たちのシベリア鉄道・モンブラン登頂・シルクロードの大計画が最終的に日本一周に落ち着いたのも、その生きて帰って残念会に参加した鍋会メンバーの中に自動車部の人間がいたからだ。その自動車部の彼は自分たちの手で自動車を作って、その作った自動車に乗って日本一周をすると息巻いていたからそれはそれでとんでもない計画だった。私たちはそのことを当時聞いたから日本一周になった。刺激し合うことは人の行動を変えていく。

そしてこれは余談だが、生きて帰ってきた彼は大学を卒業して防衛省自衛隊に入った。大学卒なので幹部候補生で要職についた。やはりソビエト連邦の機銃掃射の刺激が強すぎたのかもしれない。

■集大成は映画

日本一周に始まり、沖縄、冬の北海道、日本各地の小旅行、そしてヨットやダイビング旅行などの旅の記録を残すべく大学4年生になって映画制作に挑戦した。タッグを組んだのはそのほとんどに一緒に行ってくれた大川だ。



映画は静止画と動画に合わせて BGM とナレーションを加えたものになった。もちろん現在のようなデジタル技術ではなく、光学式なので簡単ではなかった。

日本一周の写真のネガは残っていたので、ネガフィルムからスライドを起こした。4年生になってから私は光学式8ミリカメラを購入しており、その8ミリフィルムの動画が残っていた。この2つを組み合わせ、ナレーションと BGM を付けて1時間の映画としてまとめた。

映画のタイトルは「俺たちの旅 76～78」、内容は自分たちの旅の足跡を記録した記録映画というものだった。市内の喫茶店を借り切って試写会兼完成披露パーティを行った。そのイベントは自己満足ながらも成功した。今思うと懐かしく、そしてよくもそこまでやったと驚いてもいる。

【映画のタイトルのカット】

第五章 社会人独身時代

■社会人になって

1979年4月に電機メーカーに入社し、小学生の頃から憧れていたエレクトロニクスエンジニアになった。そして1982年4月に結婚したので私の社会人独身時代というのは約3年間しかない。

私の配属先は研究所だった。当時はエレクトロニクスの分野での日本の国際競争力は世界トップクラスで、それは私の仕事が相当に忙しいことを意味していた。平日は終電近くまで残業して土曜日も休日出勤が多かったので、日曜日は休養と洗濯にあてていた。当時の一か月の残業時間は100時間超えが当たり前で、最多残業時間は333時間になったこともあった。それでも仕事もプライベートも共に充実していた。

プライベートは、後に妻になる彼女と付き合っていた。しかし超多忙な仕事のためにデート中に眠ってしまうということが数回あった。このことは今でも妻に言われている。

研究所の社員旅行や研究室の職場旅行、同期入社の仲間の旅行などには積極的に参加した。現在はそのような社員旅行を実施している会社は少ないが、私は社員旅行や職場旅行が好きだったのでその復活を願っている。



【入社1年目の研究所の社員旅行 日光鬼怒川】



【同期入社のテニス合宿】



【入社2年目の研究所の社員旅行 伊豆三津シーパラダイス】

出張に有給休暇を付け足して旅行したこともあった。思い出深いのは九州出張の後にかねてから行きたいと思っていた長崎県の五島列島に立ち寄ったことだ。福江島の三井楽町の海は白と青で透き通っていてとてつもなく綺麗だった。日本の本土近くにもこんな綺麗な海があったのかと驚いた。当然潜りたかったが、出張帰りで道具を何も持っておらず、カメラ片手にスーツ姿で観光をした。



【五島列島福江島の三井楽の高浜海水浴場】

■兄の死

五島列島に行った翌月の1980年7月に兄が亡くなった。私が24才で、兄はまだ27才という若さだった。

それは突然の死だった。兄は中学校、高校と柔道部に在籍し、桐生高校柔道部の主将までしていたくらいで体はとても丈夫だった。しかし膠原病という難病にかかり入院して2週間くらいで亡くなった。

私は、亡くなった兄の遺体の前で兄の分まで親孝行をすることを誓った。

■スポーツ&旅行

学生時代に買ったヨットを活かすべく、学生の夏休みに比べたら短い期間だが、車の屋根にヨットを乗せて大川と能登半島一周の旅に出た。セーリングを楽しみながら能登半島を巡った。

「日本で一番きれいな海」というキャッチコピーの能登半島先端の鉢ヶ埼海岸キャンプ場をベース地にした。日本で一番きれいな海を名乗る場所は日本各地にたくさんある。五島列島の三井楽の海も綺麗だったが、当時の私はこの鉢ヶ埼海岸こそが一番だろうと思っていた。

砂が真っ白でゴミ一つない遠浅な海岸にヨットを浮かべると白い砂の海底にヨットに影がくっきりと映る。そして海の彼方には富山の北アルプスの山々が見え、時々は蜃気楼を見ることもあった。

以降、私はこの海岸にはかなりの回数訪れることになる。



【鉢ヶ埼にてセーリング】

当時の若者たちの間ではスキーが流行っており猫も杓子もスキーをしていた。私も会社の同僚たちと、あるいは室長も一緒に研究室全員で泊まり込みのスキー旅行に行った。場所は志賀高原、野沢温泉、湯沢温泉、蔵王温泉さらに北海道ニセコにまで足をのばした。婚約中の妻も大学時代の鍋会の友人カップルたちと一緒に群馬県のスキー場に行った。

スキーは年に数回、それも泊まり込みで行っていたのでかなりの回数になった。



【ニセコへのスキーツアー】

■大阪独身時代

1981年4月から私は大阪の研究所に派遣された。それは関西旅行という意味ではラッキーだった。大阪を拠点に京都、奈良、神戸という観光地に毎週のように行った。そしてお好み焼きをはじめ関西の庶民グルメを食べ歩いた。大阪で過ごした1年が私の最後の独身生活になった。

沖縄で覚えたダイビングをするために大阪の研究所の仲間たちと紀伊半島の串本に潜りに行った。大阪からは南紀は意外に近い。

大阪の研究所では卓球部に入った。その仲間たちと夏の息抜き旅行に若狭湾の民宿に泊まってどんちゃん騒ぎをし、まだまだ青春時代を楽しんでいた。



【大阪時代 会社の独身寮にて】



【卓球部の夏の旅行】